

## 10 和束町二本一古墳出土の須恵器提瓶

菱田哲郎・田口裕貴

### 1. はじめに

二本一古墳は、和束町大字中小字二本一にかつて存在した古墳である。『和束町史』1巻<sup>1)</sup>では、1955年ごろに耕地の拡大のために取り除かれたとされ、聞き取りの結果からそのおよその位置とともに、直径9 m、高さ約2 mの墳丘をもつ円墳であったことが推定されている。その場所は中村川と和束川の合流部に向けて南から延びる尾根の先端部にあたり、現状ではまったく古墳の痕跡をとどめていない(図3)。古墳の規模から石室を用いた古墳は考えにくく、『京都府遺跡地図』<sup>2)</sup>も、「土壌墓？」とする。一応、埋葬主体は木棺直葬であった可能性を考えておきたい。1938年に出土した須恵器が和束中学校に伝えられており、箱書きから提瓶と高杯があったことが知られるが、現在は提瓶のみが残されている。

この二本一古墳から南西に200 mほどの場所には、大杉古墳が存在した。大字中小字大杉にあり、個人の宅地内に存在していたが、1983年に墳丘が削平されたということである<sup>3)</sup>。その際に人物埴輪が出土しており、『京都府遺跡地図』にも出土品の欄に人物埴輪を記す。ただし、同書では時期を後期とするのに対し、この埴輪を紹介した小池寛は、付属する大刀の表現から「5世紀後半をくだらない」と位置づけており、大杉古墳が中期に帰属する可能性が示されている<sup>4)</sup>。いずれにしても、二本一古墳に先行する可能性が高いと想定される。

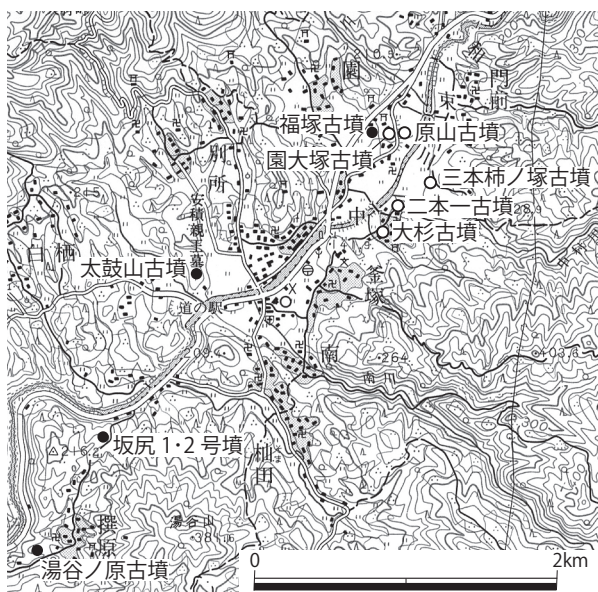


図1 和束町の古墳分布



図2 二本一古墳の位置

(昭和49年和束町作成2500分1地形図を50%縮小)

二本一古墳出土の遺物は、和束中学校から教育委員会に移され、今日に至っている。町内に所在する貴重な古墳出土品であることから、町史編さん事業の一環として、詳しい観察をおこなったうえで、実測図作成、写真撮影を実施し、この古墳の位置づけを図ることとした。(菱田哲郎)



図3 二本一古墳の跡地の現況

## 2. 二本一古墳出土遺物

二本一古墳出土の遺物としては、1938年に出土した須恵器提瓶と高杯の各1点が伝えられている。提瓶は教育委員会が保管しているが、高杯については、現在その存在は確認できず、『和束町史』第1巻にも写真・図面ともに掲載されていないため、その詳細は不明である。

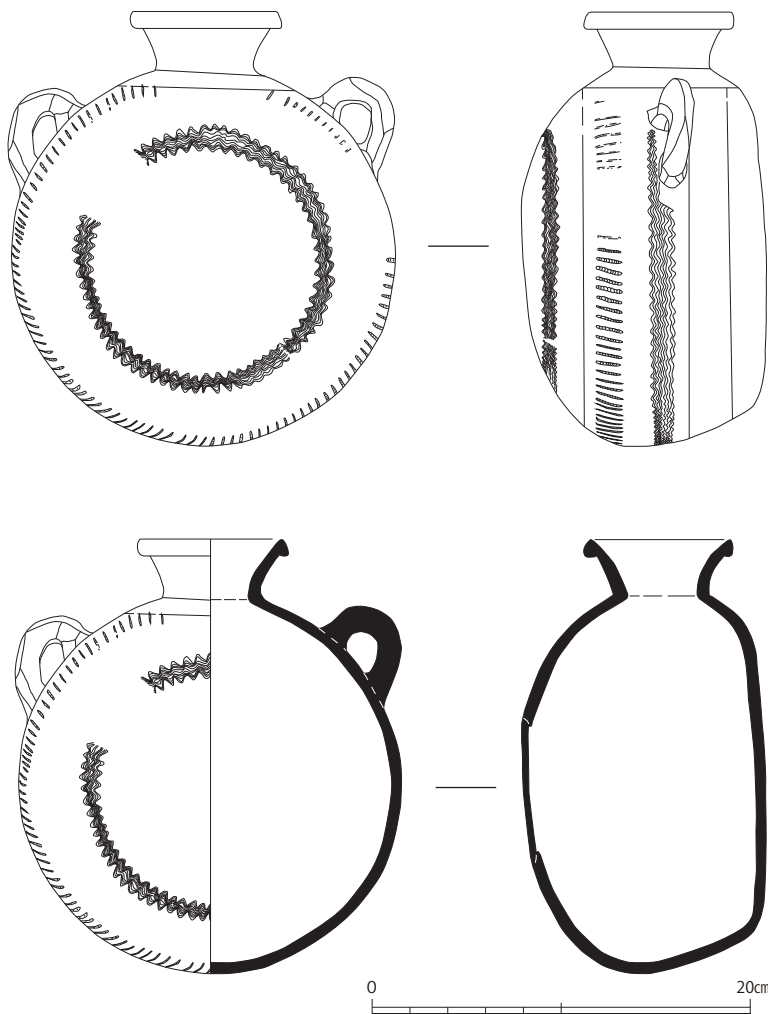


図4 二本一古墳出土の須恵器提瓶

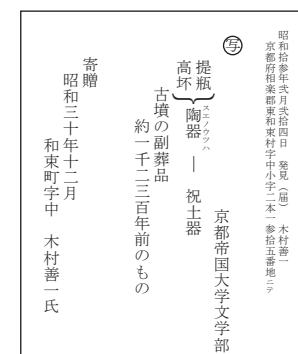


図5 提瓶保管箱の箱書き



図6 二本一古墳出土の提瓶（左から正面・右側面・背面）

提瓶（図4・6）は木箱に保管されており、その蓋の裏には図5のような箱書きが認められる。箱書きには発見された年月日や発見者名、古墳の所在地のほか、「京都帝国大学文学部」の文字とともに「古墳の副葬品 約一千二三百年前のもの」という記載が認められ、当時の学術的鑑定を受けたことが読み取れる。また、「写」の文字からは、昭和30年以前に同様の内容を記載したものがあり、寄贈の際に現在の箱書きに改められたことが想定される。

法量はそれぞれ、口径7.5cm、器高23.0cm、胴部正面幅20.3cm、胴部側面幅12.9cm、頸部長3.3cmをはかる。頸部は短く外反しながら立ち上がり、端部は三角形に肥厚する。胴部の左右の肩部には半環状の把手が取り付けられている。胴部の一方は丸みをもち、他方は平らになっていて、平らな方が製作時の下面であることがわかる。そこで、丸みのある方を正面と呼ぶこととする。内面を観察すると、正面側に円形の粘土板を貼り付けて胴部を閉塞していることがわかる。胴部正面では、一部で摩滅がみられるが、10線1条の波状文が全周している。また、その外周の正面から側面にかけての部分では列点文が頸部の付近を除いて全周している。さらに、側面では把手の下端からもう一方の把手の下端にかけての範囲に8線1条の波状文が施されている。時期については、外反しながら立ち上がる口頸部や三角形に肥厚する口縁端部といった特徴から、MT15 型式併行期～TK10 型式併行期に位置付けられ<sup>5)</sup>、6世紀前半から中葉の年代を与えることが可能である。（田口裕貴）

### 3. おわりに

和束町内に残された数少ない古墳出土遺物である二本一古墳出土提瓶について、改めて検討をおこない、年代についての手がかりとすることができた。近くにあった大杉古墳がやや先行すると考えられることから、中期から後期にかけての比較的規模の小さな古墳がある程度まとまって存在した可能性も考えられる。また、ここから北東に300mほど行ったところにあった三本柿ノ塚古墳も、尾根先端の段丘上にあった古墳と考えられ、時期的には5世紀後葉に属することが知られている。時期的に相前後する古墳が和束川の左岸に点々と存在していたことがわかり、さらに消滅した古墳の存在などを考える必要性が高くなったと考える。福塚古墳の報告でも触れたように、和束川の右岸には、より規模の大きな古墳が中期から後期にかけて展

開していることが明らかになっており、和束川を挟む同時期の古墳どうしの関係のほか、未発見の集落域の推定など、これからの課題も多く残されていることを指摘していきたい。(菱田)

註

- 1) 乾幸次 1995「和束町の古墳」『和束町史』1巻、和束町
- 2) 京都府教育委員会 1985『京都府遺跡地図』第5分冊、同委員会
- 3) 注1)と同じ
- 4) 小池寛 1994「人物埴輪から見た刀装具について＝京都府和束町・大杉古墳出土例を中心に＝」『京都考古』74号
- 5) 小池寛 2010「須恵器提瓶再考」『京都府埋蔵文化財論集』6集、京都府埋蔵文化財調査研究センター